

大学入試改革及び新型コロナウイルス感染症の影響による進路指導について（教育長）

緑友会福岡県議団の神崎聡です。3月1日は多くの高等学校の卒業式でありました。私が卒業したのが、ちょうど40年前になりまして、光陰矢の如し、歳月はアツという間に経ってしまいます。何年か前に母校県立田川高等学校で全校生徒に「水平線上に突起をつくれ！」という演題で、講演する機会がありました。講演後に、質問時間がとられていまして、一人の生徒から「人生とは何ですか？」という、哲学的な質問を受けました。

私はとっさに、次のように答えました。「人生という漢字には、四つの読み方ができます。それは、人が生まれる事。人が生きる事です。これからの皆さん方の人生は、人を生かす事、そして人を生む事です。」

「うお〜！」という響めきが講堂の中に響きました。実はこれ、結婚披露宴の時の私の定番の来賓祝辞でありまして、まさか高校生に、結婚披露宴での挨拶の一部を話すとは思いませんでした。来賓挨拶というのは、どこでどう役に立つのかわかりません。

そこで教育長にお尋ね致します。教育長、人生とは何なんでしょうか。これから人生を切り拓いていこうとする福岡県の高中生・若人たちに、教育長から、力強いメッセージを一言お願い致します。

さて、今年の大学受験は、受験生にとって五重苦とも言われました。これまでのAO(アドミッション・オフィス)入試が「総合型選抜」に、従来の推薦入試が「学校推薦型選抜」へと変わりました。そして、これまでの大学入試センター試験から代わったのが、「大学入学共通テスト」で、去る1月16日、17日に行われました。この大学入学共通テストは、当初、入試改革の目玉とされていた「英語民間試験」と「記述式問題」の導入が見送られるなど、国の対応が現場の混乱を招きました。また文部科学省による入学定員が厳格に管理され、受験生にとっては、大変厳しい入試となりました。さらに追い打ちをかけるように襲いかかったのが新型コロナウイルスであります。

私には4人の子供がいますが、その末っ子が今年大学受験となりました。これまでの子供たちとはまったく異なる入試制度と環境に、本人はもとより、親としても戸惑い、翻弄され、不安を抱えながらの受験となりました。

今回、保護者の立場で大学受験に関わり、いくつかの諸課題が見えてきましたので、来年度以降の入試を見据えて、教育長に質問します。

これまでの大学入試とは大きく変わった要因は、やはり「高大接続改革」の影響によるものだと考えます。高大接続改革とは、高校教育と大学教育、またそれらをつなぐ大学入学者選抜を、ひとつのつながりとして教育を行うことを目的とした取り組みのことで、文部科学省が推進しております。

これまでの大学入試は、高校教育で優れた成績、或いは入試により高得点を獲得した受験生が合格していました。しかしながら、本来、高校教育や大学教育というものは、社会の中で生きる力を学ぶものであり、大学受験における点数の良し悪しだけで評価されるものではありません。したがって、高校と大学の接点を増やし、高校生・大学生の学習意欲を高めるために、高大接続改革の必要性が議論されるようになったんだと、私は認識しています。

そのため、これまで高校と大学をつないでいた「大学入試」を大幅に見直し、「大学入学共通テスト」を導入し、総合型選抜・学校推薦型選抜を含め、出題傾向や審査基準などを大きく変えたということになります。

そこで大学入試改革により、高等学校の学習指導、進路指導の課題について2点、教育長にお尋ね致します。

一つ目は、新たな入試に対応した指導、授業のあり方はどのように変わったのですか。また変えようと考えているのですか。

二つ目に、個別選抜に関して、入試の多様化への対応をどうされていこうとお考えでしょうか、お尋ね致します。

大学入試改革に加え、令和2年4月7日には緊急事態宣言が発出(はっしゅつ)され、学校現場では、臨時休校による生徒の学習の遅れや、中間・期末テスト等の成績、健康観察から消毒液の手配まで、様々な対応に翻弄され続けたと思います。

進路指導に係る主な課題をあげますと、「臨時休校、分散登校中の学習の遅れ」、オンライン授業の限界もあったと思いますし、リモート学習も行われていない学校もあったと思います。授業確保のためタイトなスケジュールに加え、3密を避けるための進路説明会、保護者説明会、3者面談などの実施方法の変更や入試選抜方法の多様化、入試日程の変化への対応、高大接続改革、コロナ禍の変化についていけない職員への意識改革等々、課題を挙げるときりがありません。

一方、受験生の方では、コロナ禍で弱気になり、希望する大学をワンランク落として、安全志向による出願に踏み切った受験生も多くいたのではないかと推測されます。だからこそ、各学校の進路指導において、模試データの分析結果などを活用し、自信を持たせるよう丁寧な進路指導をしていく必要があるのではないかと感じました。

また、急変する家庭の経済状況に直面する生徒への支援も必要ではないでしょうか。家庭の状況が厳しくなり、大学志望だった生徒が、専門学校や就職へと進路を変更する状況も全国では起こっているという報道もありました。

教員一人ひとりが奨学金の制度などをよく理解し、この件についても丁寧な進路指導を行っていく必要があります。

教育長、今年の学校現場での学習指導、進路指導は適切に行われたと考えますか。学校現場の対応と教育長の所見をお聞かせ下さい。

来年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響が続くのであれば、今年度の課題を踏まえた具体的な対策を講じなければなりません。特に学習指導においては、臨機応変な学校体制の構築が急務であります。臨時休校、分散登校、時差短縮授業における授業の遅れを取り戻すためにどうするのか。年間進路指導計画、成績会議、調査書発行、推薦会議のスケジュールを柔軟に対応できるように学校長のリーダーシップとマネジメント、経営力が問われます。

県教委におかれましては、各学校の先進的事例や実施状況など情報を共有させ、学校間の横断的な取り組みをスピーディに対応しなければなりません。教育長の責任は重大です。教育長の決意を伺います。

次に県立高校の就職内定状況と来年度の取り組みについてお尋ね致します。

我が会派の代表質問で、県立高校の内定状況は令和3年1月末現在で、96.5%になったことがわかりました。ほぼ例年並みということで、県教委、関係機関の努力が功を奏し、少し安堵致しました。と申しますのも福岡労働局が発表した、昨年10月末現在の卒業見込みの県内の高校生に関する就職内定状況を見てみますと、求職者6,247人、内定者は3,851人で、内定率は前年同期比16.6ポイント減の61.6%となりました。もちろん新型コロナによる休校に伴って選考開始が1か月遅れたことも要因の一つでありましたが、非常に厳しい状況でした。

そして福岡労働局によると、緊急事態宣言でハローワークを訪れる人が減ったことが影響しているものとみられますが、本県の1月の有効求人倍率は、就業地でみますと0.94倍となっております。飲食や宿泊業を中心に依然、低い水準で、厳しい雇用情勢が未だ続いております。

航空会社や大手旅行代理店、金融機関等々、希望早期退職や出向など、そして新規採用が抑制され、採用見送りの動きが広がっている現状の中、私たちは、第2の就職氷河期世代を生むような事態は何としても避けねばなりません。バブル崩壊に伴う1990年代半ば以降の就職氷河期世代が、今日でも社会全体として大きな問題となっていることを考えると、むしろ来年度以降の就職状況を注視していかなければならないと考えます。

そこで教育長にお尋ね致します。今年の春に県立学校を卒業する高校生で、未だ就職が決まっていない人数をお聞かせ下さい。その方々の今後の進路については、どのように考えているのか。高校とハローワークや若者就職支援センターとの情報共有、連携など今年度の課題を踏まえ、来年度の取り組みをお尋ね致します。

冒頭、高校生から「人生とは何ですか」と問われた話をしました。

人生には実に様々な転機や失敗、挫折、試練が待ち構えています。受験、就職、結婚、転職や退職、親との死別・・・

人生という山登りは決して平たんなものではありません。時には歯を食いしばって急な

斜面を登り、時には崖に落ちないように一步一步慎重に進み、山あり谷あり、それが人生というものだと思います。

いつの日か、登ってきた山々を振り返ってみると、そこにはなだらかな曲線の山々を眺めることができます。人生とはまるで山の稜線のようにあります。

私からも社会へと巣立つ若人に一言、「山を登ることは努力の一步、人生を切り拓くことも努力の一步」 ご清聴ありがとうございました。